
はんぱあぐ

夢介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんばあぐ

【ΖΖコード】

N74671

【作者名】

夢介

【あらすじ】

夫婦水入らずの夜のはずが・・・
ジエットコースター的なテンポの良いショートショート。

1・(前書き)

作品の性質上数ページあります、シートシートです。

「久しぶりの夫婦水入らずだね」

妻はそういうながらケチャップがたっぷりかかる、一口サイズに切り分けたハンバーグを口に運んだ。

ハムほどのリビングに30代半ばくらいだろうか、夫婦がふたりで食事をしていた。

「全く母さんは、急に近所の友達と食事に行って来る、なんて・・・」

夫は、少し不服そうにケチャップがたっぷりかかったハンバーグを口いっぱいに頬張った。

「でも、いつもやつてふたりだけで食べるのもたまにはいいものよ」

「まあね・・・」

と少し照れくさそうに話をしている。

「じゃあ、この後一緒にお風呂に入っちゃう?」

妻は、夫をのぞき込むように甘える顔で見上げた。

夫は、

「・・・うん・・・」

と照れながら返事をする。

突然、ピンポンと呼び鈴が鳴る。妻は箸を置き、

「はい」

と言しながら玄関に向かつ。

新聞か何かの勧誘だらうか？しばらく玄関で、妻は話し込んでいるようだ。

夫が気になり始めた。その時・・・

「 もやあああ」

妻は悲鳴を上げながらリビングに走り込んできた。

夫も、箸を置き妻に駆け寄った。

すると、妻を押しのけるように部屋の中に入つてくる男、手には包丁を握っている。倒れ込んだ妻は、夫に手だけですり寄った。

夫もしどろもどろで

「 な、なんだ君は・・・」
と言いながらも、腰が引けている。

「 金を出せ!」

強い口調で男がわめき出す。さすがに夫もこの勢いに負けて

「 ひいっ」

と言いつぶを上げ腰を落とす。

男は尚、強い口調で

「 金だ!」

と包丁を振り回す。

「 か、金はやるから、助けてくれ」

夫は妻に被さるようにしながら言った。

男も興奮しているのか、息をきらしながら

「ガタガタ言うんじゃねえ！」
と夫に包丁を突きつける。

夫はあわてて後ろポケットにある財布を取り出すと男に差し出す。
男は中を確認し、札を全部抜き取り、財布を投げ捨てる。

「も、もういいだろ」

夫は男に懇願した。

男は妻に包丁を突きつけ

「お前のは？」

と詰め寄った。

妻は、今にも泣き出しそうな顔でタンスの上を指さす。

男は、タンスの上の女物の財布を手に取り、財布の中身だけを抜き出し、またタンスの上に財布を戻した。

「まだ、あるだろ？」

男は包丁を振り回しながら、リビングの机上に並べられていた食事を床になぎ落とし、食べかけのハンバーグがケチャップの筋を残しながら転がった。

妻も夫も口を利用しないのが、ただ首を横に振るだけ。

「通帳と印鑑は？」

との問いかにも、ふたりとも黙っている。

「ちつ！」

男は舌打ちをして本棚、タンスの中を手当たり次第に中のものを放り出して調べている。

夫と妻は、目で男を追いながらも、ふたりで手を握り合いガタガタと震えている。

リビングの床は、ちらばつた食事の上に洋服や下着、雑誌などが散乱した。

部屋の中で一番大きい洋服ダンスに手をかけて開けたとたん、何か大きなものがドスンと転げ落ちた・・・

胸に包丁を刺され死んでいる老人だ。

一瞬みんなの動きが止まつた・・・

「お母さん!」

妻の声が部屋の中に響く。

男は、何が起ったのかわからない様子で
「な、なんだ？・・・お、俺はやつてないぞ・・・誰がやつたん
だ？」

と焦った口調で言葉を並べた。

「僕がやつたんだ」

夫が冷たく口を開いた。

男は、引きつった目で夫を見て包丁を手から落とす。そんな様子
を妻は呆然と見ている。

そんな中、夫の冷たい目がにやりと笑い、淡々と話を始めた。

「先週、僕・・・会社を首になつて・・・そのことで、これからの一
こととか色々聞いてきて・・・あんまりうるさいので・・・殺した・
・・」

妻は口に手をあててあきれたように見ている。

「俺は、知らないぞ・・・か、関係ないからな・・・」

男は怖くなつて逃げ出そうとしているが夫は逃げ場を手でふさぎ

「それは、あんまりにも自分勝手じゃない？」

男はまるで、悪いことをしたことが見つかってしまった子供のよ
うな、怯えた顔をして夫の顔をのぞき込む。

相変わらず表情を変えず、夫は話を続ける。

「今日・・・食事をした後に夫婦ふたりで心中しようつと思つてたんだよ・・・」

妻は、はつと我に返り・・・

「あなた・・・」

と声を詰まらせてくる。

「せつかく、ふたりで死ねるよつてセットして置いたの・・・」

「セ、セット?」

男が訪ねる。

夫は、お母さんのいた洋服ダンスの中を「onso」、「onso」と探し出す。洋服を何枚か取り出した後、

「これだよ・・・」

と言いながら、3~4本の筒状のものに、アナログ時計が銅線でつながっている機械をリビングの机の上に置いた。

「じ、時限爆弾?」

見てすぐにわかったのか男の声はひっくり返つている。
妻は遠巻きにその機械を見て震えている。

「ああ、もう時間がないや」

と言いながら、夫は時計をのぞき見る。時間は後15分ほどになつている。

「お、俺は関係ないぞ」

男は、逃げ腰である。

「あんたも運が悪かつたね～。大事な夫婦水入らずの時間を邪魔するからですよ・・・」

あいかわらず冷たい口調で話す。

「本当にそれ爆発するのか？」

男は口の渴きを押さえながら聞いてみた。

「確かめてみる？」

と言つて、夫は時計のつまみを回さうとした。

「ま、待て待て！」

男はあわてて夫の手を握り止めた。

「どうちにしても、もうすぐ本当がどうかわかりますよ・・・」

男は、へたり込み妻の方へにじりよる。そして妻と手を握りあつてガタガタと震えだす。

「な、なあ、そんな事をしたつて、何の徳もないんだぞ・・・」

男は、説得を始める。

「また仕事探して、一からやつてこいつ・・・なつ？」

妻は、感極まって大声で泣き出した。

「ここに見たことは黙つててやるから・・・考え方直して・・・」

男は、赤い顔をして必死に説得している。

夫は全く聞こえていないように時計を眺めている。

妻は金切り声で泣き叫んでいる。

「と、とりあえず・・・それをどうにかしてして・・・」

と男が言いかけたとき、妻の泣き声がピタリと止まる。

妻は何かを思いだしたように立ち上がりふらふらと歩きだした。
そしてタンスの中から一枚の用紙を取り出し、夫に渡す。

「離婚届？」

夫はびっくりしたような声を上げた。

「もう、ずいぶん前から考えていたの」妻は、表情を変えずに話している。

「そ、そなんあ」

夫は妻に、すがるよつに言い寄つている。

男は、このすきに出ていいひつとしたが、妻に見つかってしまい、襟首を捕まれた。

「あんたにも聞いてほしいのよ…」と声を荒げて引き戻されてしまひ。

男は

「『めんなさい』、『めんなさい』

と言いながら、妻の前に直立した。

「あたしには、あなたと結婚する前からずいひつとつもありてこる彼氏がいるの

夫と男はあ然としている。

「あなたなんかと違つて、ちゃんと仕事をしている、大手証券会社の社員なの・・・」

夫は

「ずつとなの？」

と聞くと、妻は大きくうなづき

「それに、おなかには赤ちゃんもいるわ」

夫と男は目を見合わせる。

「もちろん、あなたの子供じゃないわ」

と言つたとたん、夫は大きく崩れ落ちて大泣きを始めた。

「今日彼と会う約束してるから」

と冷たく言い放つと、散らかっている洋服の中から、着替えを始めようとすると、夫は妻の足にしがみついて

「捨てないでくれえ」

と泣き叫ぶ。

「奥さん、それはひどいよ」

そういうながら、男も妻を足止めしているが、全く聞いてくれない。

妻が、散らかっている洋服等の中を模索していると、お母さんの亡骸を見つけ感極まって、お母さんにしがみつき

「お母ちゃん、黙つてしまめんなれーー」

と泣き叫び始める。

夫は妻の背中にしがみついた

「捨てないでくれえ」

と泣き叫んでいる。

男は、

「何でこんな家入っちゃったんだ・・・」

と悔やんで泣いている。

そんな中、突然電話のベルが鳴り響き、みんな我に返る。

しばらく三人とも沈黙して電話を見つめていたが、一番近くにいた夫が、咳払いをひとつして電話に出る。

「はい、もしもし……」

妻も男も動きを止めて、夫の電話の声に耳を傾けている。

「おう、吉田か……何?・・・・・宝くじ?・・・・」

妻と男は、耳だけじゃなく顔も夫の方を見た。

夫の顔が一変し

「当たつてるう?」

と喜びの表情になる。

その瞬間妻は慌てて新聞を探し、男は夫の財布の中に宝くじがあつたことを思い出し、慌てて財布からそれを取り出した。そして部屋の中央に、ふたりでちらかっている物をどけて座り込んで確認し始めた。

「い、いくわよ」

ふたりとも息を飲んだ。

「一等一億円・・・」

そこに電話を置いた夫も加わる。

「32組・・・」

男は復唱しながら確かめる。

「3・・・・5・・・・7・・・・4・・・・6・・・・5・・・・!」

最後の数字を読み終えたとたん、三人の顔が喜びの顔になる。

「やつたあ！」

思わず抱き合つて喜ぶ三人。

「あなたあ、やつたわねえ！」

「「」には、金があると思つてたんだよな

喜びを隠せない妻と男。夫も

「だろ？だろ？」

三人で輪になつて浮かれている。

満面の笑みで、三人とも子供のよつとはしゃいでいる、妻は
「あなたにずっとついていくわあ」

男は、うれしそうに当たりくじを手につかみ
「俺にも少しわけてくれよな」

夫も

「おー、おー、わかつた、わかつた」
とうれしそうにうなずいている。

三人で当たりくじを囲み

「バンザーリ」「バンザーリ」「バンザーリ」
とバンザイ三唱をして浮かれている。

6
.

その時、时限爆弾が0秒を示した。

6・(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
このトントンポの良いショートショートを作っていますので、他の
作品も是非ご覧下さい。
感想や評価や批評などもいただけすると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7467i/>

はんばあぐ

2010年10月22日09時41分発行